
晴れた夜の星は輝く

YUNO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

晴れた夜の星は輝く

【Nコード】

N8872Y

【作者名】

YUNO

【あらすじ】

ごくごく一般家庭で育ったアリシアは、自分の希望通りではないものの王宮の第三書庫で整理係として働くことになる。彼女の周りの人物、出来事によって、頑張ったり、解決したり、成長したり、そして、恋をしたりする、そんなお話。

00話 彼女の仕事

アリシア・メラーズは、ミッドチエザリア国の中央都市セイルアークにある、ごく一般家庭に生まれた娘であつた。年はもうすぐ17になる程で、どこかへ嫁ぐ宛がなければ、高等部卒業と共に職を見つけないければならなかつた。しかしながら卒業まであと1ヶ月を過ぎて、彼女の働き先は未だ決定していなかった。それはなぜか。彼女には、働き先として2択しか与えられていなかったからだ。

「やっぱりあのとき風邪をおしてでも面接に行けば良かったんだわ。」

「あら、あなたあのとき熱が高くて歩けもしなかつたのに、どうやって話すつもりだつたの？」

「行けば何とかなつたかもしれないなかつたでしょ、お母さん。」

「それでも、今更言つても遅いでしょう。さつさと決めておしまいなさい。」

そうは言つても、決められない。

アリシアは、父と同じように国家管理局で働きたかつた。文字を読んだり書いたり、そういうことが大好きだつたから、きつと事務員としてなら能力も発揮できると思つていた。幼い頃から父に異国の文字やこの国の文字の古代版などを習つてきた。いつかその知識を使つて、人のために仕事ができるのだと思つていた。けれど、事務の仕事を得るための試験や面接の重なつた1週間、わたしは見事に重度の風邪の症状に見舞われていたのだ。

ふらふらする頭と、定まらない視界、そして自分では3秒たりとも立っていられない足、それをもつてしても何とか会場へ行こうと

したが、部屋から出る前にアリシアは意識を失っていた。そうして目が覚めたのはそれから3日後。ふらつく足で部屋から出られたのはそれからまた4日後のことだった。そうしてアリシアは、これからの人生を決めるといつても過言ではない大切な1週間を、見事に失ってしまったのであった。

「だけれど、2つしか候補がないのよ？」

「2つとも他の人からしたら喉から手が出るような仕事場よ？」

「でも、わたしのしたい仕事ではないもの。」

「そう言っているは何の仕事もできないわよ？それとも、誰か他の人を見つけて結婚でもするのかしら？」

「……ちゃんと働くわよ。」

アリシアに与えられた2つの選択肢。それは、王宮に書庫整理係、または軍の食事配給係であった。ふたつとも働きに出る場所さえ聞けばそれはそれは素晴らしい仕事のように思える。それでも、書庫整理係、食事配給係というのは限りなくアリシアのやりたいことからは遠くかけ離れ、この国の一般的な考えとしては2つとも中級、または下級の仕事とされていた。それにこの仕事のアリシアの元へ来た理由は、アリシア本人には無かった。父が国家管理局という、国家機関で働いているからだ。つまり、コネなのだ。国家機関で働くものにも子どもがいるのならば、条件なく国の一部の機関で働くことが出来る。しかしながらそれは、実力の問われない仕事、つまり結果を求められない仕事ばかりなのだ。

「アリシア、お前は本や書き物が好きだろう？とりあえず、王宮の書庫で働いてみたらどうだ？きちんと努力して知識を得て、高い夢を掲げてきたお前にとっては退屈な仕事かもしれないが、そんな退屈な仕事でも誰かがやらなければならぬんだぞ。」

「そうよアリシア。そして風邪を引いたのも、誰のせいでもなく、

あなた自身の問題だわ。いい加減駄々をこねるのはやめなさい。試験も面接もないのに仕事をもらえるだけあなたは幸運なのよ？」

父と母に諭すように言われても、アリシアは気乗りしなかった。自分が悪いというのは百も承知だった。だからこそ悔しくてたまらない。こんなはずじゃあなかつたのだ。それでも過去には戻れない。自分のやりたいことじゃなくても、選ばなければならぬことはある。

「うん・・・そう、そうね。やってみるわ、わたし。そこで仕事を評価してもらって、いつかは事務の仕事をもらせるように、頑張ればいいのよね？」

そう自分にも言い聞かせれば、父と母はようやく笑ってくれた。

00話 彼女の仕事（後書き）

始めてしまいました、このお話。コメディ要素があまりありませんが、楽しんでいただけるように書き進めていこうと思います。

登場人物や、国や地名などは全て実在のものとは関係ありません。むしろ国や地域はわたしが勝手に作った名前です。

どういった方向になり、結末を迎えるか、まだわたしもぼんやりとしています。この小説を書きながら、わたしも成長出来るよう頑張ります。

01話 彼女の始まり

涙を浮かべる父と、微笑みを浮かべた母に別れを告げ、大きな荷物を持ち、わたしは王宮へ向かう道を歩き始めた。やはりまだ自分の仕事にやる気を見出せない。父のコネで仕事を得るということもそれを甘んじて受ける自分のことも許せない。だけれど、わたしに選ぶチャンスくれた、それを裏切りたくなかった。掴んで、自分のものにしてみせようと、そう決めたのだ。

「王宮だなんて、いつも遠くから見たことしかないわ・・・」

そう易々と一般人が入れるはずのない王宮は、セイルアークのちよつど中心にある。丸い形の建物で、その周りをまた丸い芝や森が囲んでいる。国家機関で働く者の子どもに、そこで働くチャンスがあるといっても、王宮からの仕事もらえることはそうそうない。わたしが生きてきた中でも、1度あつたか無いかくらいである。

「それでも、どうせ王宮で働くなら、機密文書とか、王宮御達し書物とか、そういったものに携わってみたかつたわ・・・」

などと、またひとりごちてみる。ひとりで愚痴を言うくらい、誰にも迷惑はかけないだろう。いかんせん、まだ他の仕事に未練がないとは言えないのだから。そうぶつぶつ言っている間に、王宮のちよつど正面までたどり着いていた。泊まり込みでの仕事のために、女官や下女などのための宿所が与えられていた。まずはそこに向かえば良いはずだ。そう思い、そこへの道を聞くために大きな大きな門の番をしている体つきの良い男に尋ねてみる。

「何か用が？」

「アリシア・メラーズと申します。本日より、王宮付第三書庫整理係の仕事を頂いております。それ故に、宿所への行き方をお尋ねしたく参りました。」

「・・・アリシア、と言ったな。確認を得るまでここで待つて頂くが、よろしいか。」

「はい、お願いいたします。」

そういつてその体つきの良い男は別の門番に何か小さな声で耳打ちし、その門番が王宮の後ろへ走っていったあと、再びわたしに向き合った。

「メラーズ殿、仕事を得るのは初めてか。」

「はい。先日高等部を出たばかりにございます。」

「そうか。初めての仕事が王宮とは、なかなか大変だろうが、ここで働くということは、それがそのまま国民の生活へ直結すると考えても良いと思うぞ。誇りに思うと良い。」

「・・・そう、ですね。そう思えるように仕事をしたいと思いません。」

「ああ。俺はローランド・タリスという。何かあれば何でも言うてくれて構わない。」

ありがとうございます、とそう言ったところで、先ほどの門番がこちらへ戻ってくる。確認がすっかり取れたようで、その門番の人はわたしに付いてくるように言った。ローランドさんにもう一度頭を下げて、宿所への道を歩く。

宿所は赤レンガで造られた3階建てだった。正面の入り口から反対側に位置し、王宮を囲む広大な庭の中にあつた。周りに花壇と湖があり、その向こうには森が広がっていた。わたしが案内されたのは第二宿所で、24人の人が住んでいるという。門番は宿所の前ま

で案内してくれた後、ハンナという宿所長に会うように言い、仕事へ戻っていった。忘れず御礼を言ったあとに受け取った荷物を抱えなおし、宿所の中へと足を踏み入れる。思ったよりも中は綺麗で、レンガの赤い色からは柔らかい雰囲気を受ける。これからここに住むのだと思うと、悪い気はしなかった。

「おや、あんた新入りかい？」

しばらく宿所の中を観察していると、背後から声が聞こえて思わず勢いよく振り返った。すると、そこにはピンクに近い色をした髪をひとつに束ね、たくさんの洗濯物を抱えた中年の女性が立っていた。肉つきの良い体と、血色の良い顔、今こちらを見ているその表情も、にこやかでどこか懐かしい感じのする人だった。

「あ、はい。アリシア・メラーズと申します。今日から王宮の書庫整理係として働きます。」

「ああ！アリシアね！人事から話は聞いていたよ。よく来たね、いらっしやい。あたしはこの宿所長、ハンナってんだ。好きに呼んでくれて構わないよ。すぐに部屋に案内するからちょっと待ってなね！」

そう言い終わらない内にハンナさんはすぐ傍にあった戸を引いて、そこに洗濯物を持ったまま入っていった。しばらくして出てきたハンナさんは、「こっちだよ」と言っただけでわたしを部屋に案内してくれた。

「あんたの部屋は1階の108。ここの入り口からは遠いけど、窓を使っていけば王宮からはいちばん近いからね！」

「わあ・・・素敵な部屋ですね！庭がすぐそこに見えるから、景色もとてもよいです。入り口から遠くつても全然気になりません！」

窓は、使いませんよ！」

言つて、ハンナさんと笑い合う。良い人で良かった。王宮に勤めている人というのは、どこか堅苦しくて、厳しい人だというイメージがあつたけど、ハンナさんはまるで逆の人だ。明るくて、太陽みたいに笑う人だと思つた。

「じゃあ、この部屋は好きに使つて構わないからね。食事は、朝は7時から9時、昼は11時から2時、夜は6時から8時までつて決まつてんだ。食堂はさつきの入り口をすぐ左に行つたところだよ。洗濯はその右。分かつたかい？」

「はい、有難うございます。」

「何かわからないことがあつたら何でも聞きな！あたしでも、ここに住むみんなでも、みんな良い性分だから、あんたもすぐに慣れるだろうよ。」

そう言つてハンナさんは、じゃあまたね、と付け足して出て行つた。改めて自分の部屋を見渡してみる。真っ白のベッドに、濃蒼の毛布とシーツ、小さい木製の机に、同じ木で作られたタンス付きのクローゼット。シンプルで背の高いライトが立っていて、扉の傍には全身が見える鏡があつた。大きな窓は今は閉められているけど、淡い水色のカーテンは開けられているから、外の庭の雰囲気が良く見える。晴れた日はとても気持ちが良いだろう。とても気に入つた。

今日から、ここがわたしの部屋。少し、胸が弾んだ。

02話 彼女の決意

荷開けをし、一通り部屋に並べたあと、案内状に記載されている通り、人事の人への挨拶と仕事内容の説明を受けるために王宮内へ向かうことにした。案内に書いてあった時刻は14時。今はまだ、13時40分。だけれど、遅れるよりは早い方が良さだろう。もしかしたら道に迷うかもしれないし。

そうして初めて従業員専用の入り口から、王宮へと足を踏み入れた。一応余所行きの格好をして、靴もそれなりのものを選んだはずだったけれど、それをもつてしても王宮の床を踏むことが躊躇われるほどだった。どこを見ても美しい以外の言葉は思い浮かばない。それほどまでに、今まで見てきた景色とは格が違っていた。何やら絵画や壺がたくさんあるのが分かるが、それらの価値は全く分からない。とりあえず自分の予想を遥かに超える価値であるだろうことは分かるため、それらと万が一にでも接触したりしないように十分に距離を置いて歩く。

案内状に記載されている地図、1階、西の方角のフロアを歩いてみると、「人事統括室」という文字が見える。ここにたどり着くまでに5分は経っているから、なかなか良い頃合だろう。ノックを2回する。すれば、「何用か。」という重低音の声が聞こえた。

「アリシア・メラーズと申します。本日より王宮付き第三書庫整理係の仕事を頂いております。」

「入ってよろしい。」

許しの声をもらい、金のノブをもつドアを開けた。「失礼します」と言い、ドアを閉める。そこには5人くらいの黒と金の制服を着た男たちがおり、中でも一番大きな机に座る眼鏡を掛けた黒い短髪の

男は、一番高い官職のように見えた。そしてその人が部屋の中に入ったわたしを確認したあと、高級そうな椅子から立ち上がり、こちらへ足を進める。

「・・・13時47分。常識はあるようだな。」

「・・・は？」

「君もコネだろう？君のように、親の力で仕事を得た若者は、当たり前のように仕事に対してやる気がない。当たり前のように遅刻当たり前のように欠席をする。実際そういう風に何通もほかの機関から報告を受けているからね。だから君のこともあまり期待はしてなかったよ。君は中等部、高等部などで成績が良かったみたいだから王宮への招待を与えたが、所詮はコネだからね。」

重低音ですらすらと辛辣な言葉を生み出すその人は、どうやらわたしを快く歓迎してはいないことが分かった。今さらコネだコネだといわれても、実際そうなのだから仕方ない。だけれどやはり、実際にこうやって見下されたり本人を知る前に評価されたりするのは悔しいのだ。

「わたしは確かにコネで仕事を得ています。それでも、わたしは仕事に遅刻したり、欠席したりしません。責任や、努力といった言葉を知っています。今はわたしのことをどんな風にお思いになっても構いません。それでも、わたしがきちんと自分の仕事をこなし、わがものと出来たときは、今おっしゃったお言葉、撤回していただけますか。」

「何とまあ、・・・生意気な小娘だな。・・・まあいい。正直、君に仕事が出来るとは思っていないからね。どうせすぐに辞めてしまっただろう。おい、マーティン、案内してやってくれ。」

絶対にやめたりするものですか！と反論しようとしたところで、

赤茶色の髪をした長身の男性が立ち上がる。綺麗な顔をしているな、と素直に思った。この偉そうな人もなかなか整った顔をしているが、どこか冷たい印象を受ける。実際性格も冷たいけれど。でもこのマーティンと呼ばれた人は、柔らかい印象をもっている。

「オスカー、お前はもう少し棘の無い言い方は出来ないのか？初めて仕事をしにやって来た女の子に、そんな言い方はないだろう。」

「うるさい。これが俺の性格だ。今更どうにもならん。じゃあ、あとは頼んだぞ。」

「あーあ、そんなだから未だに嫁さんももらえないんだよ。ねえ、えーと、・・・」

「あ、アリシアです。アリシア・メラース。」

「そう、アリシアちゃん。よろしくね、俺はマーティン・リード。マーティンって呼んでくれて構わないよ。あの眼鏡はオスカー・ブラックストーンっていうんだ。名前まで堅そうだろう？」

マーティンさんが言って、思わず噴出してしまった。どこからか冷たい視線を受けた気がするけれど、そんなものには気付かないふりだ。「じゃあ案内するよ」というマーティンさんの後を追って、人事統括室を出た。

「それにしてもアリシアちゃん、君なかなか度胸あるよ。あのオスカーにああやって切り返せる人物はなかなかいないからね。だってあの表情にあの声、なかなか怖いだろう？」

「確かに威圧感がありました。だけれどそれよりも腹が立ったんです。仮にも人事のトップにいる人が、人をそういう風に判断しても良いのか、って、思ったんです。」

「うん。それを声に出して伝えられるのは、君の強さなんだろうね。見ごたえあるなあ。これで俺の他にもオスカーに意見出来る人が増えたか。正直今まではあいつの雰囲気と口の上手さで、口答え

出来る人がいなかったんだよ、俺以外ね。でもアリシアちゃんは俺の良い味方、みんなの良い手本になりそうだ。」

「わたしとしては、そう何度も意見しなければならぬ程接触しなくてはならないんですけどね……」

言うと、マーティンさんは「そりゃそうだ」と声を上げて笑った。ああ、この人、綺麗に笑う人だ、と思った。きっと誰に対してもこんな風に、分け隔てなく接することが出来る人なんだろう。現に今日初めて会ったわたしが、こんなに穏やかに話せるのだから。

「さて、ここが第三書庫だよ。」

少しばかり大きめの扉の前で、マーティンさんは立ち止まった。

そして木と銀で出来た扉を開ける。そうすると、目に入ってきたのはたくさんの本……ではなく、たくさん埃にまみれた本だった。

「……これは……なかなか、年季が入っているようですね……」

「誰も近づこうとしないんだ。こうなっちゃってしまつては目当ての本も見つけられないからね。」

「ということは、今は誰も使っていないんですか？」

「俺の聞く限りではね。それでもここにも重要な書物はたくさんあるし、これからもどんどん増えていくだろう。だから、君が必要なんだよ。君の仕事は、この第三書庫をきちんと使える環境にすること、そして誰にとつても使いやすく、分かりやすく陳列すること、さらに君も書物の知識を得て、人が利用しやすくすることだ。そうそう出来ることでは無いと思うけど、それでもこの量だ、きつとやりがいはあるんじゃないか？」

正直に言えば、今あるのはかなり大変だ、という感想だけだった。

ここが自分の仕事場になると思うと、少しばかり憂鬱になるくらいだった。それでも自分で決めたこと、オスカー室長にも強気なことを言ってしまった以上、もう後にはひけないのだ。やるしかない。

「はい、第三書庫整理係として、立派に仕事をこなしてみせます。」

03話 彼女とその人の出会い

マーティンさんに言われた仕事のスケジュールは、何とも簡単なものだった。朝9時に出勤、昼は12時から1時間の休憩、そのあとは6時に退勤、だそうだ。やることは決まっている。とりあえず向こう数ヶ月はこの片付けに専念することになるだろう。誰もいないはずの第三書庫で、がっくりと頭を下げ、思わずため息を漏らした。すると、足元に溜まった埃が、綺麗になくなっているところがある。それはどうやら人の足跡のようで、奥にある本棚まで続いている。

「マーティンさん、ここは誰も使っていないって言ったのに・・・」

とりあえずその足跡を辿ってみると、どうやらその人物は東方の言語について調べ物をしていらしい。ここ第三書庫は国々の歴史や言語、文化についての書物がずらりと並んでいる。その中でも言語に絞っているこの一角の、しかも東方の言語だけを集めた棚だけが、埃もなく、いたって綺麗な状態であった。これは誰かが継続してここに通っているという証だった。それも、東方の言語について調べたいのに、あまり時間のない、忙しい人だろう。なぜなら、東方の言語に関する書物は限られており、東方の国々の言語も30より少ないはずだ。ならばこの棚にある一つの言語に関する書物は少ないはず。それでもまだ狙いを定められずに色んな本を試している段階であるなら、よほど読むのが遅いか、よほど時間が無いのかどちらかだろう。

そしてその人物が調べているらしい言語が、ケペル国という小さ

な国で話されているものだった。その言語の元となった言葉なら知っているが、わたしもケペル語自体は知らない。

「ケペル語を勉強すれば、その人の力になれるかもしれないわよね。」

そう思い、埃叩きを右手、「ケペル語完全解説」という分厚い本を左手に、わたしは第三書庫を歩き回った。

なるほどケペル語は、やはりその元となったニルティン語を強く受け継いでいた。ところどころ単語は違うけれど、基本的な文法の並びや表現などはよく似ている。綴りも規則性を覚えれば解読も何とか出来るだろう。と、そういった結末にたどり着いた頃、いつの間にか自分が書庫の読書場の椅子に座っていて、埃叩きを握っていないことに気付いた。そして、辺りはもう真っ暗だということにも。

「・・・何時間没頭してたんだろう・・・。」

ああ、晩御飯も食べ損ねている。道理でお腹もすくはずだ。今から宿所に戻れば晩御飯に間に合うだろうか。第三書庫にある時計はどうも埃をかぶっていて見えない。まるで時計の意味が無いではないか。明日ここに来たらまずは時計を見えるようにしようかと決めて、ケペル語の本を棚に片付け、さて宿所へ戻ろうとする。と、そこで、木の軋む音がした。

「・・・先客がいるとは思わなかった。お前は何者だ。」

声を聞いただけでも、思わず背中がぞくりとした。明らかに身分の高い人と分かる。年齢がそれほど高くないにしても、これほど威圧感と存在感、高貴さを出せる者はなかなかいない。一度も顔を

見たことがなくても、それが王族の人であることが分かった。わたしよりも頭2つ分は高い身長をもち、体つきもまるで逞しかった。さらさらとした深蒼の髪がとても美しい。薄めの唇は血色が良く、強い意志を表す眉は凛々しく、整った形をした鼻は高く、そして何より、綺麗に二重の線を持った灰紫色の瞳が印象的だった。ここまで美しい男の人を見たことはなかった。

「お初にお目にかかります。わたくしはアリシア・メラーズと申します。本日よりこの第三書庫の整理係をさせて頂いておる者にございます。このような無礼な格好で大変申し訳御座いません。」

「整理係……?」

「はい、まずはこの第三書庫を使える状態にし、皆様に書庫の案内をしたり、管理したりするようにと、任されております。」

「では、お前は書物について詳しいのか?」

「全ての書物を網羅している訳では御座いませんが、文字や言語といった分野においては、取るに足らない程で御座いますが、少しばかり習得しております。」

「!そうか、……では、ケペル語という言葉は、知っているか。」

「……ケペル語で御座いますか。」

「やはり知らないか……。ケペル語はかなり東方のしかも小国の言語だからな。」

おそらくこの人が熱心にケペル語について調べていた人物であろう。それも、今日から勤めだした整理係に知識を得ようとするところ、よほど切羽詰っているように思える。

「いえ、ケペル語の元になったニルティン語ならば知識は御座います。ケペル語とニルティン語の差は大して御座いません故、おそらく簡単な文章であれば解読は可能かと存じております。」

「それは本当か！」

嬉しそうに目を輝かせたその人は、わたしが頷くと大きく笑みを零した。「やつと見つけた」と小さく呟いたその人は、着ていたシルクのシャツのポケットから大事そうに何かを取り出した。そして先ほどの笑みを消し去り、真面目な顔をして言った。

「お前に頼みたいことがある。この手紙を、解読してほしい。」

「わたくしに、ですか。」

「この王宮にお前以外、ケペル語を操れる者はいないし、不用意に他の人物に知ってもらっては困る内容でもある。お前、たとえこの内容を解読しても、それを俺以外の誰にも言わないと、約束できるか。」

正直に言えば、厄介なことを頼まれていると感じた。この内容がどんなものであるにしても、他の人に見せられないくらい重要なものであるそれを、わたしが抱えて良いのだろうかと躊躇する。それ以前に、ケペル語をすっかり操れなかつたらどうするのか。どんな罰が与えられるのか。そういった保身までも考えてしまう。それでもこの人の瞳を見れば、それに従わなければならぬような気にさせられてしまう。これが、位の高い人の持つ力なのだろうか。

「・・・はい。約束いたします。」

言った。言ってしまった。その人は数秒わたしと目を合わせたあと、問題の手紙をわたしに手渡した。両手で受け取ったわたしに、「大事なものなんだ」と付け加えた。

「王太子殿下！殿下、どこにいらっしやいますか！公務がまだ終わっておりません！殿下！」

承知いたしました、と答えたかったが、それは扉の外の大声によつて止められた。叫びながら廊下を走っているだろう声の主は、今にも泣きそうな声で王太子殿下を求めていた。と、そこで目の前にいた人物が嘆息した。

「俺は戻らなければならぬ。明日またここに来る。．．．アリシアと言ったな。くれぐれも宜しく頼んだぞ。」

そう言つてその人が書庫から出ていった後すぐ、「殿下！こんなところにいらしたんですか！」という声が聞こえてきた。まさかそうなのではと思つてはいたが、やはりそうだったのか。王宮に勤めだして1日目で、最高位にも成り得る人物に会うとは思つていなかった。その事実をじつくり認識したあとわたしは思わず膝を折り、その場へたり込んでしまった。しかしながらその後、間抜けな腹の音が書庫に鳴り響き、とりあえず夕食を求めて宿所に戻ることにしたのである。

これが、わたしとハウエル王太子殿下の、出会いだった。

04話 彼女と手紙

その人の名前は、ハウエル・ラルフ・ヴォルティ・オルブライト、といった。多少名前が長めであることは否めないが、しかしいかにも位の高そうではある。彼は現国王であるリチャード、王妃であるオリヴィアとの間に生まれた、それはそれは高貴な王子なのである。ハウエル殿下は幼い頃より勉学に励み、政務を体験してきたという。だから国王も王妃も彼を次の王として認めていたし、国王女ステラも兄を自慢としていたし、ライバルであるはずの第二王子アーウェルでさえも、兄を次期国王とするためのサポートをするほどに慕っていた。

というのも、彼の努力は凄まじかったそうだ。何が彼をそうさせるのかは分からないが、まだ遊び盛りの年頃でも、そんな時間などほとんど無いほど、彼は日々自分を追い詰めていたという。

そんな彼が、今、政務よりも気をとられている、この手紙。

この手紙は、政務とは関係のないものであると気付いたのは、部屋に帰ってケペル語の本を広げながら、手紙の2行目を解読した後だった。

「殿下には、まだ王宮の幹部でさえ知らない秘密がある・・・。」

第三書庫を出た後、急ぎ足で宿所に戻った甲斐があつてか、7時45分に食堂へとたどり着いたわたしは、何とか夕食を得ることが出来た。食堂のおかみさんが「もう残り物しかないんだけどねえ」と言っていたそれは、まるで残り物とは思えないほど美味しくて、思わずおかわりしてしまったほどだった。おかげで満腹になったわたしは、湯につかった後そのまま寝てしまいそうになった。しかし

ながら、そういう訳にはいかないのだ。なぜならこれは、王太子殿下から直々の命令なのだから。

という訳で、何とか眠さをこらえながら手紙の解読を始めたのだが、何か国家に関わる大変な機密が隠されているのでは、と少しばかりわくわくしていた気持ちは、ある意味正解で、ある意味裏切られた。

「ええと・・・、しんあいなる、おうたいし、でんか・・・、けっこん、の、もうしで、・・・の、へんじ・・・を、かく・・・？書きます、か。」

とそこで、思わず「ええ！」と声をあげてしまった。なんとこの手紙には、王太子が結婚を申し出るほどの想い人からのもので、しかもその返事が書かれているのだ。それが分かった途端、思わず手紙から手を離れた。それがあまりにも大事なものであることも分かってしまったからだ。

「これはある意味国家機密だわ・・・。」

それというのも、ミッドチェザリア国王太子殿下は、今年で18歳になった。この国の歴史でいえば、それくらいの年ならばすでに妃を迎えていてもおかしくはないし、現国王であるモリス陛下はすでにその年で子を成していた。だからハウエル殿下は国王や王宮幹部から妃をとるよう催促されていただろうし、実際国民にも殿下が妃をとるためのパーティを開くといった情報もいくつか流れていた。そして殿下がそれらを全て、断っているということも。

その理由として、まだ早いだとか、今は勉強に集中したいだとか、そういったものが噂として流れてはいたが、真相は誰にも知り得なかった。だけれどそれを、わたしは知ってしまった。殿下にはどうしても結婚したい人がいて、でもその人と結婚できる状況には無い

ということだ。もし結婚できる状況にあるのなら、手紙を通してやり取りなどしなくても良いはずである。

「あなた、の……きもちは、とても……うれしい……うれしかった……です」

「そんなに、ちいさい……ときから、わたしを……すき、でいた……とは、しりません、でした」

そこには、彼への感謝の気持ちが記されてあった。それから、読み進めていく内に、彼女の正体も、どうしてこうした言語を使ったのかも、彼女の、返事も、分かってしまった。わたしが知るべきではない、全て。

彼女は、隣国の王女だ。おそらくカツアートリア国の、ヘイリー王女である。ミッドチェザリア国とカツアートリア国はもともと、良好な関係を保っていた。ほんの数年前までは、お互いに足りないところを補い合うような、このふたつの国の間に争いなんてあり得ないだろうと誰もが考えるほど、平和な関係だった。実際数年前までは、1年に4回、両国の王宮で食事が開かれていた。おそらく殿下と王女もそこで出会ったのだろう。

ところが、数年前。カツアートリア国の王宮幹部のひとり、ミッドチェザリア国で決して許されることのない、大きな罪を犯してしまった。

視察と称してミッドチェザリア国に来ていたその幹部は、カツアートリア国がその仕事のために与えた資金を、博打に手を出して全て失ってしまった。このままでは国に帰れない、そう思った彼は、あるうことかその賭け場に違法経営の疑いを着せることで、自分が騙されてお金を失ったように見せかけたのだ。カツアートリアはその幹部の言い分を信じてしまい、しかしミッドチェザリアはどうしてもそれを信じることは出来なかった。信じてしまったら、自国民

を裏切ることになるのだから。何度も何度も自国を良くしようと、視察、調査、改善を行ってきたものに他国が横槍を入れる。それは温厚な国といわれるミッドチエリアにとっても、許すことは出来ないことだった。そしてそれはカツアートルリアにとっても同じことだった。もし王宮に抱えている幹部が問題を起こしたとなれば、国として大問題となることは間違いない。たとえ、他国との関係は悪化したとしても、国内の環境を悪化させることは出来なかったのだ。

そうしている内に、ミッドチエザリア国とカツアートルリア国の関係は、どんどん冷めていった。争いこそ起きなかったものの、基本的な交流は現在絶たれているままだ。そしてそんな状況の中、殿下はカツアートルリア国王女を妃にしようとしている。人の移動はもちろん、手紙のやり取りでさえ検査される状況の中、彼は王女に求婚したのだ。

「あなたの手紙の内容も、わたしの手紙の内容も、決して人に知られてはいけません。」

手紙には、そう記されていた。従者に隣国へと一旦手紙を運ばせてからミッドチエザリア国へ送る、と。国同士の書物の行き来については必ず検査官が存在する。それらに内容を読み取られることのないよう、わざとこの国には馴染みがない文字を使った。実際、それは単なる時間稼ぎであって、異国から知らない文字で手紙が届いた、という情報が入れば、王太子殿下直々に命を出してすぐに回収しに向かえば良いのである。

これだけ分かっただけでも、わたしにはふたりの絆の強さが感じられた。よほどの覚悟と信頼が無ければ、きつとこんなことは出来ない。だからこそわたしは、このふたりは必ずこの苦しい状況を乗り越えるのだらうと、そう思った。

ヘイリー王女からの答えを、
解読するまでは。

05話 彼女の苦悩

「ちよつと、新入りー！起きなさいよ！あんたの仕事、9時からでしょう！？もう8時過ぎてるわよー！！」

朝から何事か。けたたましく鳴り響く高い声と、乱暴に叩かれる部屋の扉。ただもう少し静かにしてくれないか、と思っただけれど、その人の言葉の意味するところを知って、慌てて飛び起きた。・・・遅刻だわ！

「ちよつと！起きてるの！？遅刻になってもしらないわよー！」

「あ、あの、起きてます。ありがとうございます！」

「・・・それならいいわ。早く着替えて食堂にいらっしやい。」

扉越しにお礼を言い、足音が遠ざかっていくのを聞いてから、慌てて身なりを整える。まさかあのまま眠ってしまうとは。どうやら手紙の解読中にベッドにも行かないまま、机に突っ伏してしまっただよつだ。手紙にしわや折り目などがついていないか入念に確認してから、それを自分もつ一番良い布にくるんでエプロンのポケットにしまい込んだ。最後に髪をくくってから、なんとか朝食を得ようと食堂へ急いだ。

「あら、早いね。」

「あ、・・・先ほどは、ありがとうございます。とても助かりました。」

「敬語なんていらないわ。あなた、アリシアね？わたしはマーガレットよ。マーガレット・ムーア。ここでは食堂の調理と配給をやってるの。ちなみに部屋はあなたの隣よ。よろしくね。」

そう言うてにつこり笑った彼女は、先ほどの大声からは想像もつかないほど小柄で、それでいて大きなブルーの瞳をもっていた。それをまとめている布からこぼれ出た髪は桃と橙の交じったような、彼女の名前の通り可愛らしい花を思わせるようだった。

「ええ、よろしく、マーガレット。今日はあなたが起こしてくれてとても助かったわ。」

「あなたのことはハンナさんから聞いていたの。昨夜、残り物なのに美味しい美味しいって食べてくれたのはあなただって聞いたわ。」

わたしの料理が認められたようでとても嬉しかったわ、そう言うて彼女はわたしに良い香りのするパン2切れと、マッシュポテト、厚いベーコンが3枚に、野菜のたっぷり入ったスープを渡してくれた。9時まで残り30分をきっていたから、あまり綺麗とは言えない食べ方だったけれど、それでも残したくなってなんとか15分で食事を終えた。それからマーガレットにお礼を告げて、急いで第三書庫へ向かう。

「今日は8時54分。」

背筋の凍るような、いやな声が響く。王宮に足を踏み入れた直後のことだった。声の方を見ると、そこにはオスカー室長が煙草を片手に立っていた。極力、彼と会話はしたくなかったのだけれど。

「……おはようございます、オスカー室長。」

「挨拶くらいは出来るようだな。ところで、今日は昨日よりも余裕がないようだな。もしや明日は早くも遅刻するんじゃないか？」

「ご心配には及びません。まさか室長、そうやって毎日記録でも

付けるおつもりですか？」

「生憎だが、俺にはそんな暇も興味もない。」

「そうですね。それは有難いです。そのような暇が無いのであれば、すぐに仕事場にお戻りになった方がよろしいのでは。」

少々棘を含んだ言い方で、室長ににっこりと微笑みかけた。すると小さく舌打ちする音と、「……生意気だな。」という呟きが聞こえたあと、室長は煙草の火を消してから西の方角へと歩みを進めていった。そんな室長の様子に少しばかり気分が良くなったわたしは、第三書庫への道を急いだ。

昨日ハウエル殿下と遭遇したのは日が沈んだ後。おそらく彼が食事を取る前か後だ。そんな僅かな休息の間しか、彼には自由な時間がなかったということ。ならば今日彼が来る時間もそれくらいの時間であろう。それまでにわたしは、まだ解読出来ない手紙の数行と、そしてその内容をどうやって彼に伝えるかを決めなければいけない。どんなに知ってほしくないことでも、わたしが言わなければならぬのだから。

「ねえ、マーガレット。自分の好きな人が、自分のことを好きじゃないとき、あなたはその事実を知りたいと思う？」

午前の就業時間を全て手紙に費やし、とうとう手紙の全文を解読したわたしは、それを殿下に伝える覚悟をつけようとしていた。食堂での昼食の時間を利用して、マーガレットに相談をもちかける。

「あら、アリシア、あなた恋をしているの？」

「ううん、わたしじゃないの。わたしの……知り合いの人よ。」

「そう……。わたしなら、相手がわたしのことをどう思っているのか、ちゃんと知りたいわ。もしわたしのことを好きじゃなくても、理由が分かるのなら、また頑張れるでしょう？もしどうにもならないなら、別の恋を探せるわ。」

そうやって少しだけ頬を染めたマーガレットは、恋をしている少女のように見えた。彼女の事情と、殿下の事情は全く違うかもしれない。それでも、恋をしているという事実は同じ。それは殿下も、好きでたまらない相手の返答を、結果がどうであれ望んでいるということなのだ。

「そうよね……。ありがとう、マーガレット。」

わたしには、事実を変えることも、それを隠蔽することも出来ないのだから。正直に殿下に伝えることしか出来ないのだから。そう、ついに覚悟を決めて、わたしは再び第三書庫へ戻り、殿下の来訪を待つのであった。

<彼女からの手紙>

親愛なる、王太子殿下

この度は、このような情勢の中、手紙を下さり、有難う御座います。わたしも、あなたのように手紙を使って、結婚の申し出のお返事を書かせて頂きます。

この手紙は、あなたにとって難解な文字でしかないでしょう。あなたの国では、ケペル語は全くといい程認識が無く、知識も薄いのですから。しかしそれはわたしの国でも同じこと。現にこの手紙も、何十冊もの本や辞書を使って書いているのですから。

今日でこれを書き始めて3日目になります。あなたにとって、この手紙は早急に必要なものだというのは分かっています。

それでも、このような文字を使って書かなければならないというのは、あなたにはお分かりになるでしょう。

決して、誰にも知られてはいけませんのですから。あなたの手紙の内容も、わたしの手紙の内容も、決して。

あなたの国と、わたしの国との関係が、これほどまでに悪化するのは、夢にも思っていないませんでした。きっとそれは、あなたも同じでしょう。

もしあなたがわたしに求婚したという話が誰の耳にでも届いてしまえば、あなたはあなたの国に、激しく弾圧されることでしょう。ですから、わたしはこの手紙をどうしても人に知られることのないよう、一度国外へ出します。そうして、その国から改めてあなたの国に送ります。きっと頭の良いあなたなら、不可解な文字の手紙の存在を知った途端に、わたしだと分かるでしょうね。

あなたの優秀な部下は、きちんとあなたの国に帰れたでしょうか。彼がわたしの最も信頼する侍女に手紙を預けたのには、驚きました。そして感嘆しました。さすが、あなたの部下だと。けれどわたしにとつて、信頼できるのは全て侍女や女官ばかり。小さい頃から、男性との関わりは家族やあなたたち以外にはあまり無かったものですから。だから、彼女たちに国境をかくぐつてとは言えませんでしたが、どうしても。これはわたしが慈悲深いのでなく、信頼の厚さの問題なのかもしれませんね。

この手紙によつて、誰ひとりとして被害を受けることがないように、祈っています。

あなたの手紙を読んで、わたしは思わず驚いてしまいました。なぜならあなたの気持ちが、初めて会ったあのような幼い頃からのものだと知らなかったのですから。あなたの気持ちは、とても嬉しかったです。

あなたがわたしに対してくださった言葉の全てが、わたしにとっては宝物です。ほんとうに有難う御座います。

だけれどわたしは、あなたの求婚を受け入れるわけにはいかないのです。

なぜなら、わたしにも、あなたと同じように、焦がれている存在があるからです。

未来では、わたしとその人はきっと、結ばれることはないでしょう。それほどまでに、わたしの恋は叶わないものなのです。

それでもわたしは、例え国のためにどこか遠くへ嫁ぐことになつても、その人のことを想い続けると思うのです。

そしてその気持ちをもつたまま、わたしを真剣に想ってくださいるあなたとは、あなたとだけは、結ばれてはいけないと思いました。

どうかわたしの我俣を、あなたが聞き入れてくださることを、願っています。

謝ることは、いたしません。

それがあなたにとって、何の意味にもならないと分かっているから。どうかあなたが王の称号を得たときに、再びわたしたちの国々が良き友人となれるよう、祈っています。

Hより愛を込めて

06話 彼女と彼の恋

なるべく伝わりやすいように、なるべく理解しやすいように、なるべく傷つけないように。わたしはゆっくりと、それでも確実にその手紙を読み進めていた。

手紙の持ち主、ミッドチエザリア国王太子であるハウエル殿下は今、第三書庫の読書場に腰を下ろしていた。そしてその隣に、わたしは座っている。初めは殿下と同じところに席をもつなどということとはあり得ないと、ずっと立っているつもりだったのだが、「構わぬ」という声によってわたしはついに腰を下ろした。

「これが、・・・手紙の内容です。」

そう言い終わってから、長い長い沈黙があった。恐れ多くて殿下の方へはとてもしゃないが目線に移せなかった。未だに緊張が体中に広がっているのが分かる。そしてそれはわたしだけではなく、殿下からも伝わってきていた。当然だろう、彼はこの手紙の中に、彼の想いを全てかけていたのだから。

「・・・そうか。」

こんな風に、第三書庫が誰もいなくて静かな場所じゃなかったら、とても聞こえない声で彼は呟いた。その声は、わたしにはか細く震えているように思えた。

この人は、この人を動かす希望を失ってしまったのだ。それがどんなに苦しくて、どんなに切ないものなのか、わたしにはまだ知るところがなかった。どうしたって理解出来ないはずなのに、それで

もどうしてか伝わってくるこの人の想いは、わたしの胸をも締め付けた。

「殿下が今の今まで、人生の大半を勉学や政務に費やしていらっしやったのは、全て、このお方のためだったのですね。」

彼は、何も言わなかった。

「自分が知識を得て、誰からも信頼されるようになって、そして権力をもったときに、今の状況を変えるために。」

「彼女を、迎えに行くために。」

言いながら、わたしはとうとう、しっかりと殿下を見据えていた。大きな体をもつはずの彼が、今はかりは小さな子どものように見えた。深蒼色の髪が顔にかかっていて、その表情まではつかめなかった。それでも、広い肩が小さく小さく震えているのが分かった。今にも泣き出しそうだと、そう思った。だけれどわたしにはきつと、それを見てしまうわけにはいかなかった。

「殿下、わたくしは外へ出ております。もちろん、人が近づかないようにいたします。ですから、」

「良い。・・・行かなくて良い。」

立ち上がりかけた体を、その右の肘をつかまれたことよって引き戻される。どうしたものか、わたしにはこういったとき、何を告げていいのかも、どんなことをしたらいいのかも、分からないというのに。

しばらく何を言うべきか考えあぐねていると、沈黙を破る音が聞こえた。低く、良く澄んだ、きれいな声だった。

「ヘイリーは、俺の初恋だった。」

そこでついに、殿下が涙を零しているということに気付く。エプロンのポケットに入れていた白いハンカチを差し出そうとして、でも殿下に差し出せるような格好のものではないことに一瞬躊躇したが、それでも渡すことにした。彼の方に視線を移さないようにして

「あいつは、俺の全てだったんだ。絶対に、俺が幸せにするつもりだった。どんなにその状況が厳しくても、ふたりが想い合っていれば必ず乗り越えられると信じていた。・・・俺が国王となるためには、妃が必要だった。だからあいつを妃として迎えることで、ミッドチエザリアとカツァートリアの国同士の関係も修復させるつもりだった。たとえ俺が、恥も外聞も全て捨ててカツァートリアに跪くことになったとしても、・・・それでも、俺はヘイリーを手に入れたかった。」

それだけ零してから、彼はまた、黙り込んでしまった。たぶん、誰かに零したくてたまらなかつたんだろうと感じた。ヘイリー王女への気持ちを自覚してから、彼は彼女との未来を当たり前のものだと思ってきた。そのために自分に出来る全ての努力はして、彼女を迎え入れるつもりだった。たとえ数年前に国交が冷めてしまっても、自分と彼女の気持ちと同じで、婚約を発表し、王位を継承してしまえば、どんな苦勞でもして彼女を妃とするつもりだったのだ。

そしてそれを支えられるのは、彼女の彼への想いだった、のに。彼女がもつ、彼への感情は、彼が期待するものではなかった。そして彼が期待してやまない彼女の愛は、別の誰かに注がれているというのだ。

「俺は・・・何のために、・・・何をやっていたんだろうな・・・笑えるだろうか？」

殿下の灰紫色の瞳には、間違いなく諦めと喪失の色が浮かんでいた。はかなくて、今にも消えてしまいそうな輝きだった。

「笑いません。真剣な愛を笑う人などどこにもおりません。殿下が人生をかけて人を愛したのなら、それはあなたの誇りにはなりませんか。人をそれだけ愛せるあなたのことを、わたしは尊敬しております。きつとあなたのそうした愛の深さは、これから人々に広く伝わっていくでしょう。」

わたしには、そんな未来が見えます。

しっかりと、ハウエル殿下と目を合わせて、言った。無礼な言い方をしていることは、百も承知だった。でもそれを理由に彼がわたしをどうにかするとも思わなかった。さらに言えばそれを気にするよりも先に、彼に伝えたかったのだ。

彼の灰紫から、小さな、輝きがまた零れた。それは頬を伝って、ゆっくりと地面へ落ちてゆく。

「人を愛する強さも苦しみも知った殿下がいるこの国は、きつと幸せになるでしょうね。」

出来る限りの微笑みを浮かべると、2つの灰紫からはまた雫が落ちたけれど、彼はゆっくりと、ひどく優しく、笑ってみせた。

07話 彼女とその後

「君はいつたい、何をやらかしてくれたのかな。」

目の前で、高級そうな椅子に深々と座り、尚且つ足を組んで、より一層偉そうに振舞う室長は、重低音の声で言った。大きな机ひとつ挟んでいるとはいえ、眼鏡の奥の涼しそうな切れ長の瞳を見ると、やはり背筋が凍るように緊張が走る。

「と、いいますと・・・？」

とぼけているわけではない。わたしには本当に、なぜ当分のわたしの上司である人事統括室オスカー・ブラックストン室長にこうして呼び出され、今にも怒られそうな雰囲気になっているのか皆目検討つかないのだ。オスカー室長の隣の机で作業をしているマーテインさんはそんな室長に、「やれやれ」とでも言うように眉を下げて苦笑いしているため、あまり深刻な話ではないと思いたい、が。

「ハウエル王太子殿下から直々に、君に報奨が出た。なんでも、君の仕事ぶりが実に真面目で優秀だからだそうだ。」

「はあ・・・そうですか。」

「俺の記憶では、君は仕事を初めてからまだ5日目だと思っていたが、気のせいかな？」

「いえ、気のせいではありません。」

「ではなぜ、君がしている殿下の耳にも入らないような小さな仕事に対して報奨が出るんだ？」

「わたしには分かりかねますが。」

おそらく、あの日のことだろうと、思っていた。その後、殿下は礼を言ってくれただった。そして必ずやわたしに対して感謝の気持ちを表す、とも仰っていた。それがこれだというのなら、わたしは果たして受け取って良いのだろうか。

「まあまあ、オスカアの耳には入ってなくても、俺としてはアリシアちゃんはちゃんと仕事を頑張ってると思ってたし、どこからかそれが殿下の御耳にも入ったんじゃないか？」

「上司である俺からの報告もなしに、どこから殿下の御耳に入るようなことがあるというんだ？」

「そういうこともあるさ。それでもとりあえずこの報奨金は、アリシアちゃんのものになるんだから。いい加減彼女に渡しなよ、オスカー。」

マーティンさんが諭すように言い、ついにオスカー室長は追及をやめて白い封筒をわたしに渋々といった表情で渡した。それを受け取ったときの厚みだけで、とんでもない量のお金が入っているのが分かる。それでもそれを受け取らないということはある意味で、殿下の命に従わないということにもなり得る。それに、これが殿下の役に少しでも立てた証のような気がして、嬉しいという気持ちがあった。

「明日はアリシアちゃん、初めてののお休みでしょ？どうせなら友達と買い物にでも行ってきたら？」

「そうですね、そうします。マーティンさん、ありがとう御座います。」

そう微笑んで言うと、マーティンさんも人懐っこい笑みを見せてくれた。初めて会ったときもそうだけど、この人からは柔らかい印

象を受ける。未だ目線に入り込む眼鏡の冷たい人とは大違いだ。と、そんなことを考えながら一礼してから、人事統括室を出た。「おい、俺には礼は無いのか。」という重低音が聞こえてきたが、それには聞こえないふりだ。

あれから、殿下が塞ぎ込んだとか、急激にやる気を失ったとか、そういった類の噂は聞かなかった。ただ前よりも、どこかすっきりしたような、自分で自分をきちんと管理していて、周りの人を心配させるような無理はしなくなったといわれていた。どうしたって苦しい悲しい気持ちは無くならないはずだけれど、それをどこにもぶつけたりしない彼はやはり、とても強くて、とても優しい人なのだろうと思った。

「さて、今日も掃除しなくちゃね！」

そう気合を入れて、第三書庫へと行くために足を進めようとしたところ、前方の大広間の雰囲気、がらりと変わった。そこにいた全ての使用人が壁に寄り、深々と頭を下げている。これはおそらく王族やまたは招かれた貴族が通る合図。

少しばかり大広間から距離のあるわたしは、きつと視界には映らないだろうけれど、それでも例によってわたしも頭を下げた。

「王太子殿下、御視察、お疲れさまで御座いました。」

「ああ。」

王太子殿下、という声に、わたしは思わず頭を少し上げてしまう。そうして遠にいる彼は、まるで何事も無かったかのように見えた。凜々しく、逞しく、強い、そんな言葉たちがびったり収まるような姿だった。

ふいに、彼の視線がこちらへ向いた、気がした。

「・・・・・・・・・・！」

不躰に見ていたとなると、それこそ失礼にあたる。彼がそのような理由で人を罰するとは思えないが、それでも周りに人はたくさんいるのだ。

「殿下、いかがなさいました？あちらの方向に、何か？」

「いや、何でもない。・・・ありがとう」

「・・・・・・・・・・殿下？」

「ありがとう」

もう一度聞こえたその言葉は、側近に向けられたものではないというくらい、わたしにも分かった。そしてそれが、遠くのわたしの方へ向けられていることも、分かった。

だからわたしは、より深く、頭を下げた。それを見たか見ていなか、彼はまた、彼の道へ、歩みを始めたのだった。

<彼の宝物>

小さいころから、自分の瞳が嫌いだった。いくら父から受け継いだものとはいえ、こんな汚い瞳の色をもつ自分のことも、嫌いだった。母もアーウェルもステラも、綺麗な金の瞳を持つというのに、何故自分だけが父の色を受け継いでしまったのか。寡黙で厳格な父と一緒に、賑やかで優しい母たちとは違う、自分。どこか切ない気持ちがあるにはあった。

「うわぁ・・・あなたの瞳、灰色と紫が混じっているのね！」

そんな甲高い声が聞こえてきたのは、会食の最中だった。その声の主は、このミッドチェザリア国と親交の深いカツァートリア国の王女。くるくるの髪に、大きな大きな瞳を持つ彼女は、それはそれは両親にも、周りの人々にも愛されているのだということが分かる。

「・・・君の瞳は、綺麗な色をもっているね。・・・うらやましいよ。」

「どうして?」

「どうしてって、・・・俺の色は、濁っていて、汚いだろ?」

「どうしてそう思うの?あなたのその色は、早朝の空にそっくりよ。一日のはじまりを表す素敵な色だと、わたしは思うわ!」

目の前の小さな少女が、そう言った途端、どこか心が軽くなった気がした。こんな子どもの言うことに何を感化されることがあるのかと、そうも思ったが、ただただ純粹に、嬉しかったのだ。

「……ありがとう。」

「ううん、お礼なんていらないわ、本当のことだもの。」

「君は……」

「君、じゃないわ。わたしの名前はヘイリー・ブリューノ・シャルル・ナッシュユっていうのよ。とっても長いでしょう?」

そう言うてにっこり笑った彼女は、少女ではなくて、ひとりの女性のように大人びて見えた。たぶんその日から、その瞬間から、俺はヘイリーに恋をしていたのだと思う。

それから季節が変わる毎に、ミッドチエザリア国とカツアートルア国との親善会食は行われていた。そこでヘイリーに会うたびに、彼女に惹かれていくのが分かった。それと同時に、どんどん大人びていく彼女を、ただ純粹に想うだけでは足りない気持ちを持っている自分にも、気付いていた。いつの日か、彼女との未来を想像するようにもなっていた。

ところが、俺が15歳になったその年、問題は起きた。

ミッドチエザリア国とカツアートルア国の関係が急激に悪くなってしまったのだ。円満に解決する手段はきつとあったはず。それでも大人たちは、それを選ばなかった。どちらかにとって円満だとされる解決は、どちらか一方にとってはそうではないからだ。

自分に見してみれば、国の王子とはいえ、関係の無い問題だった。自分と関わりのない事件が、だけれど自分の夢にとって大きな障害となってしまうのだ。

「もう、ヘイリーには会えないかもしれない……」

その事実を知ったとき、より一層努力をした。どうすれば国同士の関係は修復されるのか、どうすれば自分がもっと決断を出来るく

らいになれるのか、そしてどうすれば、ヘイリーの笑顔をこの目で再び見ることが出来るのか。

その答えを知るために、自分に与えられた時間は全て犠牲にした。それが未来の、自分と、そしてヘイリーのためになるだろうと思っ
ていたからだ。

「ハウエル、そろそろあなたも真剣に、王妃について考えなさい。

月に一度聞く程度だったこの言葉も、18になった頃から頻度が
急激に増した。自分にとって考えられるのは一人しかいなかった。
だけれど今それを両親に告げるわけにはいかなかった。カツアート
リア国との関係に対しての最終的な決断を下したのは、紛れも無く
父だったからだ。

だけれど、着実に焦りを感じていた。ヘイリー以外に考えられな
いと思っではいても、自分が国王の座を降りるというのは考え
られなかった。小さい頃からそうなると、信じていたから。それ以
外の道は、自分にはなかったから。

王妃の催促を引き伸ばし続けるのにも限界を感じたころ、ついに
行動に出た。一番信頼でき、能力があると思っっている部下に、自分
の気持ちを託したのだ。その気持ちがヘイリーに伝わり、そして彼
女の気持ちも受け取れることを信じて。

部下に手紙を託してから、2週間。どのようなルートを使ったの
かは知らないが、想像以上の速さで任務をこなした彼に、きちんと
手紙を渡した報告を聞く。これで、全てがうまくいく。そうなるは
ずだった。

ヘイリーへの手紙には、返事は違う言語、なるべく使用人口が少ないもので書くように記した。万が一のことを考えた。彼女が俺と同じような方法で手紙を届けようとして、万が一失敗してしまったら。彼女はきつと追及され、国王に対する裏切りの罪を背負ってしまっただろうから。

だからきちんと異国の文字で記された手紙が届いた、という情報が入ったときは安堵した。これで彼女に一切の被害は無いと思ったからだ。急いで部下に命を出して手紙を引き取りに行かせる。そうしてあとは、その異国の文字さえ解読出来れば良いのだ。

だがその異国の文字は、あまりにも、難読な言語だった。

その文字がなんという言語なのかも分からなかった。しかし、王室付きの大図書館へ調べに行くわけにはいかなかった。そして部下に頼むわけにもいかなかった。これは自分の問題で、自分自身が読み解かなければならないと思ったからだ。

そこでふと、書庫の存在に思い当たる。この王宮には第一から第三まで、広い分野に対応した書庫があったはずだ、と。しかしながらよく使われる本が収納されている第一、第二はよいものの、第三は何に使うのか分からないほどマイナーな本ばかりで、そこに足を踏み入れる人もなかない、と。

チャンスだと、思った。そうしてすぐに、第三書庫での解読を始めたのである。

しかし、最初のうちはそれがどの言語で書かれているのかを見つけるだけでも一苦労だった。本の表紙に書かれている文字と、手紙の文字との一致を、何か国語分確認しただろうか。やっとそれがケペル語だということが分かった時点ですでに、1週間は過ぎていた。そうしていざ、本文の解読を始めようと、そう思っても、今まで自分を追い詰めるようにして行ってきた勉強や政務に阻まれてしまう。一体どうすればよいのかと、思い悩んでいたとき、だった。

彼女が、現れたのは。

金と橙が交じったような、まるで太陽のような髪色をもち、灰青色のよく澄んだ瞳をもった、意思の強そうな彼女。名を、アリシア・メラーズという。聞けば、彼女はケペル語を解読できるかもしれないと、そう言うのではないか。その途端、それにすがった。初めて会ったばかりの、身辺すらろくに知らない、信用できるかどうかの判断すらしていない、そんな彼女に。頼まなければいけないと、自分の何かが悲鳴をあげたのだ。

これで、全てがうまくいく。今度こそ、そう確信した。そう、彼女から解読した手紙の内容を、聞くまでは。

ヘイリーは、俺の宝物だった。

そしてその宝物には、俺以外の大切なひとがあった。

俺はどうしたって、ヘイリーの宝物にはなれない。

その事實は、ひどく胸に突き刺さった。今まで自分を支えてきた全てが、崩れ落ちるようだった。目の前が真っ暗になるという感覚を始めて思い知った。ああこんなにも、俺はヘイリーが好きだったのか、と。どこか遠くで自分を見つめる声が聞こえるようで、気味も悪かった。

「人生をかけて人を愛したのなら、それはあなたの誇りにはなりませんか。」

そのときだった。彼女、アリシアがそう言ったのは。

自分が今、無駄だと思った今までの人生を、彼女は誇りだと言う。

尊敬に値すると言う。そんな言葉は奇麗事だと、分かっているのに、分かっているはずなのに、ひどく心に染み渡り、ひどく気持ちが安らいでいく。そしてそのとき確かに、思ったのだ。

ヘイリーを愛することが出来て、ほんとうに良かった、と。

いつかきつと、俺が国王になったそのときは、ミッドチエザリアとカツアートルリアの国同士を元の良好な関係にしてみせる。そしてそのとき、きつと再び彼女に出会っただろう。宝物だった彼女と、今度は大切な、友人として。

<彼の宝物> (後書き)

これで第一章は終わりです。

ここまで勢いで書いてしまいましたので、読みにくかったかと思えます。

申し訳ないです。ですが書いていてとても楽しかったです。

次は第二章が始まります。

そろそろアリシア本人の恋をはじめたいものですが、どうなることやら…

08話 彼女と彼女のお話

「もうアリシアが来てから、1ヶ月も経つのね。仕事には慣れた？」

「うん、仕事っていつても今はまだ掃除ばかりしてるけれど。」

隣にいるのは、マーガレットだ。この1ヶ月の間に、彼女とは大分仲が良くなった。彼女のもつ大らかな性格がわたしはとても気に入っているし、出来ることならずと友達でいたいと思う。今日はふたりの休日が重なっていることから、一緒に街へ買い物に行こうということだった。

「第三書庫って、わたしは存在すら知らなかったわ。誰か利用してるの？」

「うーん・・・」

実のところを言えば、最近の利用者がいたりする。わたしの仕事態度などをたまに調査しに来るオスカー室長やマーティンさんは別として、他に。それは実は、ハウエル王太子殿下だったりするのだけれど。まだ誰にも言っていない。それに彼が、誰もいない第三書庫は使いきった頭を休めるとか、じっくり読みたい書物を持ち込むとかに適しているとそう言っていたから、誰にも言うまいと思っていた。

「そう、ね。あまりいいいわ。でも綺麗にしたら、人が来るかもしれないから、それはとても楽しみよ。」

「わたしも綺麗になったら、行くわ。だからアリシア、頑張って

ね。」

「ちょっと、そこは手伝うわ、とか言わないの？」

「いやよ、だってわたし、掃除は苦手なんだもの。」

そう言っただけでマーガレットは茶目つぱりに笑った。そうして歩いている内に、王宮の門のところまでやってくる。と、そこに、ここに来た初日に初めて言葉を交わした人物の姿を見つける。

「ローランドさん、こんにちは。」

「ああ、メラーズ殿。それから、ムーア殿。今日はどちらに？」

「これから街へ買い物に行くんです。」

「そうか。楽しんでくると良い。」

ありがとございます、と返してから門を通過して王宮の外へ出た。ふとそこで、隣で口を堅く閉じているマーガレットに気付く。視線も下向きで、どこか居心地が悪そうにしている。

「マーガレット？どうしたの、どこか気分でも悪い？」

問うてみても、返事はなく、ただ彼女は頭を振るだけだった。本当に大丈夫かと、彼女の表情を覗き込むと、その頬は赤くなっていた。ほんとうに気分が悪いのではないか！

「マーガレット、あなた顔が赤いわ！きっと、熱があるのよ。早く宿所に戻って、」

「いいの。」

「良くないわ！悪化したら、」

「いいのよ、アリシア。これは、風邪じゃないの。」

そう言ったマーガレットの声は、はつきりとしていた。では、そ

れなら、いったい何だというのか。何かに怒っているとでもいうのだろうか。思わず首をかしげていると、マーガレットはようやく下向きの視線を上げて、口を開いた。

「わたし、恋をしているの。」

「……こい?」

「そう、気付かなかった?」

「気付くも何も、どうやって?」

そこでマーガレットは拍子抜けしたように、小さくため息をついた。一体何だというのか。

「アリシアはそういう話題には疎すぎるわ。もうあなたにはバレてしまったかと思ったのに。」

「バレるも何も、今が初耳だけれど。」

「その鈍さだと、そうなのでしょうね。」

さつきからマーガレットの言葉に棘を感じるが、どうやらわたしの理解力が足りないようなので、そこにはあえて触れないことにした。さて、マーガレットのいう恋とは、一体誰に対してなのか。今までに、わたしにそれが分かっってしまうような状況があったとはとても思えなかった。

「ごめんなさいマーガレット、やっぱり分からないわ。あなたの好きな人、誰なの?」

「……あの、門番の人よ。」

ふむ、あの門番の人、というのは、わたしの予想だとローランドさんになるのだけれど。ということは、先ほど視線が下向きになっていたのは、照れ隠しということか。口を堅く結んでいたのも、緊

張して話せなかったのか。そして頬が赤く染まっていたのも、どうやら彼に対しての恋する気持ちの現れだったのか。なるほど、そこでようやく、彼女の恋のサインを知った。

「ローランドさんね？」

「・・・そう。気付いたのは、まだ、1週間ほど前のことだわ。」

そう言ってマーガレットが話してくれたのは、その恋のきっかけだった。

1週間ほど前、食材の補充のために買い物に出かけた彼女は、門を抜けるとき、ローランドさんに会ったという。今までにも何回か門で会っていたから、ただ小さく挨拶をして、そのまま通り過ぎるだけだった。門を出て、しばらくしたとき、「マルクス、だめよ！」と、母が走って王宮の門の中に入ろうとする子を叱る声を聞いたという。そうして振り返ったとき、小さな男の子は、すでにローランドさんに抱えられていた。

彼女は、ローランドさんがその男の子を厳しく叱咤するのではないかと、そう思ったらしい。けれどそれは違った。今までの厳しい表情からは想像もつかないような優しい笑みを浮かべて、大きな体を折り曲げて、男の子を地面へと下ろした彼は、その子に諭したという。

「そのとき、素敵、って思ったの。そう思っただけからは、彼のこと気がなくなって仕方なかったわ。」

そうやって話すマーガレットは、その頬を赤く染めていた。素直に、かわいいと思った。応援したいと、そう思った。それでいて少し、うらやましいと思った。わたしには誰かに恋をする気持ちがまだ、分からないからだ。いつか分かる日が、来るのだろうか。

08話 彼女と彼女のお話（後書き）

第二章の始まりです。

マーガレットの恋に重きをおきつつも、アリシアがどうやって成長していくのか、

また恋の伏線なんかも含めていけたらなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8872y/>

晴れた夜の星は輝く

2011年11月28日04時48分発行